

# 美母調教日誌

鮎川 かほる

体験版

玄関のチャイムが鳴った。梨子は、佐伯を迎えに出た。玄関ドアを解錠すると、長身の若者が日焼けした端正な顔にさわやかな笑みを浮かべながら梨子の細腰を抱いてきた。ぐいっと引き寄せられると当然のように口を吸われた。梨子は唇を開き若者の舌を迎え入れた。煙草の匂いがした。佐伯の手がスカート越しに臀部

を揉み込んでくる。荒々しい愛撫だ。

「梨子、会いたかった」

梨子は腰を抱かれたまま

「わたしもよ」

と筋肉質の胸板に顔を埋めた。子宮がきゅんと疼いた。疼きは熱い塊となって下腹部に広がっていった。

佐伯が2階の拓斗の部屋に上がっていた。梨子はうぶな少女のようにソファに座って佐伯が降りてくるのを待った。ようやくリビングのドアが開き、佐伯が入ってくると梨子は大輪の花が咲いたかのような笑みで迎えた。

「奥様、お待たせしました」

立ち上がった梨子は、身長185cmの若者に軽々と抱きかかえられ、寝室へと運ばれる。梨子は佐伯の首に両手を回し、端正な若者の顔を見上げていた。

寝室のベッドに丁寧に下ろされると、佐伯が衣服を脱ぎだした。下着を取り去ると、引き締まった身体と股間の男根を見せつけてきた。男根はすでにいきり立っている。突きつけられると梨子はためらいなくそれを口に含んだ。口の中でさらに膨らんでいく。猛々しい肉棒に感動すら覚える。愛おしい男根に舌を絡めた。

「奥様の舌使い、上達したな」

懸命に男根を愛撫する梨子は怒張から口

を離すと、

「奥様なんていや…梨子って呼んでよ」

とすねたような表情で言う。

「そうだな、それじゃあ拓斗のママさんと呼ぼうか」

「いじわる…」

「ふふふ、すねた顔もいいぜ。梨子、裸になれよ」

手を引かれ、ベッドから下ろされた梨子は、煌々と明かりが灯る中、衣服を脱いだ。ネイビーのレース柄ブラと揃いのパンティ姿になると、全裸の佐伯がブラをはずした。豊麗な白い乳房がこぼれ出る。可憐な乳首と色素の薄い乳輪だ。佐伯の

指がパンティにかかった。すっと下ろされ、梨子は足を交合に上げて全裸になった。そのまま抱きしめられると、身長差のある固いものが下腹部を突き上げてくる。ベッドに倒れ込むように押し倒され、乳房を吸われた。乳首を起点に電流が走る。指が梨子の花芯をとらえ愛撫してきた。あえぎ声が無意識に漏れ始める。怒張があてがわれた。梨子が足を緩めると、ぬるっともぐり込む感触とともに一気に貫かれる。佐伯の男根は長大で、たくましい。抽送されると梨子は若者の荒々しい性技に翻弄されていく。子宮口に亀頭がずんずんと届くのだ。短時間で昇りつ

めた。2度目の絶頂を迎えた直後、男根が抜かれた。梨子は、すばやく若者の股間に顔を埋めた。おびただしい射精だ。そのすべてを口で受け止めた。

佐伯勇太と関係をもったのは、3ヶ月前だった。家庭教師として雇った佐伯に強引に抱かれたのだ。半ばレイプだった。浅川梨子は犯されたことを隠し通そうとした。それをよいことに勇太はその後も梨子の身体を何度も何度も求めてきた。若者の性欲はすさまじく、固い男根で荒々しく貫いてくるのだ。夫を5年前に亡くした梨子はやがて真の女の快楽を教えられ、若者との性交に溺れていった。完全

に男女の関係になったのだ。

梨子は息子の部屋にジュースとクッキーを運んだ。ドアを開けると勉強机に向かう息子と寄り添って座る勇太の背中が見えた。長大な男根で貫かれていた感触が生々しいほどによみがえってきた。

「ここに置くわね」

梨子はしゃがみ込んだとき、異物のうごめきに思わず声が出そうになった。腸管に異物が詰まっており、それは拡張目的の器具だった。勇太が要求してきた肛交の要求を梨子は受け入れたのだ。まだ勇太の長大な男根を挿入することはできなかったが、毎日の拡張訓練を義務づけら

れていた。さらにノーパンで息子の部屋に入ってくるように命令されていた。梨子は勇太に命令される主従関係となっており、それは若い男根に溺れてしまった女の弱みであった。

「お母さん、拓斗君はとっても優秀ですよ。難問にも集中して取り組み、これまで身につけた知識を駆使して見事に解いています。今度の定期テストが楽しみです」

立ち上がった勇太が空のトレーを胸に抱えた梨子の前に立った。

「先生のおかげです。先生の教え方はわかりやすいと拓斗はいつも言っているの



ですよ」

梨子は長身の勇太を見上げた。日焼けした甘いマスクのこの若者は、梨子をすっかり虜にしている。息子の前だというのに、アヌスに異物を詰めさせ拡張し、さらに下着を履いていないまま部屋に入るように命令した。梨子は命令に従った。命令を拒否する選択は梨子にはなかった。